日本の文学

13

夏目漱石

中央公論社

日本の文学　13　　©1965

夏目漱石(二)

昭和40年 8 月 5 日初版発行
昭和49年 6 月30日29版発行

発行者　高梨　茂

本文活版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函凸印刷　株式会社トーブロ
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　株式会社トーブロ
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　有限会社美濃羽製函所
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

大正元年 9 月撮影

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

目次

三四郎　5
それから　179
こころ　361
注解　528
解説　中野好夫　538
口絵　漱石山房とその弟子たち　津田青楓
挿画　津田青楓

夏目漱石

(二)

三四郎

一

うとうととして眼がさめると女はいつのまにか、隣りの爺さんと話を始めている。この爺さんはたしかに前の前の駅から乗った田舎者である。発車間際に頓狂な声を出して、馳け込んで来て、いきなり肌を抜いだと思ったら背中にお灸の痕が一杯あったので、三四郎の記憶に残っている。爺さんが汗を拭いて、肌を入れて、女の隣りに腰をかけたまでよく注意して見ていたくらいである。

女とは京都からの相乗りである。乗った時から三四郎の眼についた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移って、だんだん京大阪へ近づいてくるうちに、女の色が次第に白くなるのでいつの間にか故郷を遠退くような憐れを感じていた。それでこの女が車室にはいって来た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。この女の色は実際九州色であった。

三輪田のお光さんと同じ色である。国を立つ間際までは、お光さんは、うるさい女であった。傍を離れるのが大いにありがたかった。けれども、こうして見ると、お光さんのようなのも決して悪くはない。

ただ顔立ちから言うと、この女の方がよほど上等である。口に締りがある。眼がはっきりしている。額がお光さんのようにだだっ広くない。何となくいい心持に出来上がっている。それで三四郎は五分に一度ぐらいは眼を上げて女の方を見ていた。時々は女と自分の眼が行きあたることもあった。爺さんが女の隣へ腰をかけた時などは、もっとも注意して、出来るだけ長い間、女の様子を見ていた。その時女はにこりと笑って、さあおかけと言って爺さんに席を譲っていた。それからしばらくして、三四郎は眠くなって寝てしまったのである。

その寝ている間に女と爺さんは懇意になって話を始めたものと見える。眼をあけた三四郎は黙って二人の話を聞いていた。女はこんなことを言う。——

小供の玩具はやっぱり広島より京都の方が安くっていいものがある。京都でちょっと用があって下りたついでに、*蛸薬師の傍で玩具を買って来た。ひさしぶりで国へ帰って小供に逢うのは嬉しい。しかし夫の仕送りが途切れて、仕方なしに親の里へ帰るのだから心配だ。夫は呉にいて長らく海軍の職工をしていたが戦争中は旅順の方

に行っていた。戦争が済んでから一旦帰って来た。間もなくあっちの方が金が儲かると言って、また大連へ出稼ぎに行った。始めのうちは音信もあり、月々のものも几帳面と送って来たからよかったが、この半歳ばかり前から手紙も金もまるで来なくなってしまった。不実な性質ではないから、大丈夫だけれども、いつまでも遊んで食べているわけには行かないので、安否のわかるまでは仕方がないから、里へ帰って待っているつもりだ。

爺さんは蜻蛉薬師も知らず、玩具にも興味がないと見えて、始めのうちはただはいはいと返事だけしていたが、旅順以後急に同情を催して、それは大いに気の毒だと言い出した。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとう彼地で死んでしまった。一体戦争は何のためにするものだかわからない。あとで景気でもよくなればだが、大事な子は殺される、物価は高くなる。こんな馬鹿げたものはない。世のいい時分に出稼ぎなどというものはなかった。みんな戦争のおかげだ。何しろ信心が大切だ。生きて働いているに違いない。もう少し待っていればきっと帰って来る。——爺さんはこんなことを言って、しきりに女を慰めていた。やがて汽車が留まったら、ではお大事にと、女に挨拶をして元気よく出て行った。

爺さんに続いて下りたものが四人ほどあったが、入れ易って、乗ったのはたった一人しかない。もとから込み合った客車でもなかったのが、急に淋しくなった。日の暮れたせいかも知れない。駅夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯の点いた洋燈を挿し込んで行く。三四郎は思い出したように前の停車場で買った弁当を食い出した。

車が動き出して二分もたったろうと思うころ例の女はすうと立って三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行った。この時女の帯の色がはじめて三四郎の眼にはいった。三四郎は鮎の煮浸しの頭をくわえたまま女の後ろ姿を見送っていた。便所に行ったんだなと思いながらしきりに食っている。

女はやがて帰って来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもうしまいがけである。下を向いて一生懸命に箸を突ッ込んで二口三口頬張ったが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。もしやと思って、ひょいと眼を挙げて見るとやっぱり正面に立っていた。しかし三四郎が眼を挙げると同時に女は動き出した。ただ三四郎の横を通って、自分の座へ帰るべきところを、すぐと前へ来て、身体を横へ向けて、窓から首を出して、静かに外を眺め出した。風が強くあたって、鬢がふわふわするところが三四郎の眼にはいった。この時三四郎は空になった弁当の折を力一杯に窓から放り出した。女の窓と三四郎の窓は一軒おきの隣であった。風に逆らって抛げた折の蓋が白く舞い戻ったように見えた時、三四郎はとんだ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong

ことをしたのかと気がついて、ふと女の顔を見た。顔はあいにく列車の外に出ていた。けれども女は静かに首を引っ込めて更紗の手帛で額のところを丁寧に拭き始めた。三四郎はともかくもあやまる方が安全だと考えた。

「ごめんなさい」と言った。

女は「いいえ」と答えた。まだ顔を拭いている。三四郎は仕方なしに黙ってしまった。女も黙ってしまった。そうしてまた首を窓から出した。三四人の乗客は暗い洋燈の下で、みんな寝ぼけた顔をしている。口をきいているものは誰もない。汽車だけが凄じい音をたてて行く。三四郎は眼を眠った。

しばらくすると「名古屋はもうじきでしょうか」と言う女の声がした。見るといつの間にか向き直って、及び腰になって、顔を三四郎の傍まで持って来ている。三四郎は驚いた。

「そうですね」と言ったが、はじめて東京へ行くんだから一向要領を得ない。

「この分では後れますでしょうか」

「後れるでしょう」

「あんたも名古屋へお下りで……」

「はあ、下ります」

この汽車は名古屋留まりであった。会話はすこぶる平凡であった。ただ女が三四郎の筋向うに腰をかけたばかりである。それで、しばらくの間はまた汽車の音だけになってしまう。

次の駅で汽車が留まった時、女はようやく三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内してくれと言いだした。一人では気味が悪いからと言って、しきりに頼む。三四郎ももっともだと思った。けれども、そう快く引き受ける気にもならなかった。何しろ知らない女なんだから、すこぶる躊躇したにはしたが、断然断わる勇気も出なかったので、まあいい加減な生返事をしていた。そのうち汽車は名古屋へ着いた。

大きな行李は新橋まで預けてあるから心配はない。三四郎は手ごろなズックの革鞄と傘だけ持って改札場を出た。頭には高等学校の夏帽をかぶっている。しかし卒業したしるしに徽章だけはもぎ取ってしまった。昼間見るとそこだけ色が新しい。後ろから女がついて来る。三四郎はこの帽子に対して少々きまりが悪かった。けれども ついて来るのだから仕方がない。女の方では、この帽子をむろんただのきたない帽子と思っている。

九時半に着くべき汽車が四十分ほど後れたのだから、もう十時は過っている。けれども暑い時分だから町はまだ宵の口のようににぎやかだ。宿屋も眼の前に二三軒ある。ただ三四郎にはちと立派過ぎるように思われた。そこで電気燈の点いている三階作りの前を澄まして通り越

して、ぶらぶら歩行いて行った。むろん不案内の土地だからどこへ出るかわからない。ただ暗い方へ行った。女は何とも言わずについて来る。すると比較的淋しい横町の角から二軒目に御宿という看板が見えた。これは三四郎にも女にも相応なきたない看板であった。三四郎はちょっと振り返って、一口女にどうですと相談したが、女は結構だというんで、思いきってずっとはいった。上がり口で二人連れではないと断わるはずのところを、いらっしゃい、――どうぞお上がり――ご案内――梅の四番などとのべつにしゃべられたので、やむを得ず無言のまま二人とも梅の四番へ通されてしまった。

下女が茶を持ってくる間二人はぼんやり向い合って坐っていた。下女が茶を持って来て、お風呂をと言った時は、もうこの婦人は自分の連れではないと断わるだけの勇気が出なかった。そこで手拭をぶら下げて、お先へと挨拶をして、風呂場へ出て行った。風呂場は廊下の突き当りで便所の隣にあった。薄暗くって、大分不潔のようである。三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込んで、少し考えた。こいつは厄介だとじゃぶじゃぶやっていると、廊下に足音がする。誰か便所へはいった様子である。やがて出て来た。手を洗う。それが済んだら、ぎいと風呂場の戸を半分あけた。例の女が入口から、「ちいと流しましょうか」と聞いた。三四郎は大きな声で、「いえたくさんです」と断わった。しかし女は出て行かない。かえってはいって来た。そうして帯を解き出した。三四郎といっしょに湯を使う気と見える。別に恥ずかしい様子も見えない。三四郎はたちまち湯槽を飛び出した。そこそこに身体を拭いて座敷へ帰って、座蒲団の上に坐って、少なからず驚いていると、下女が宿帳を持って来た。

三四郎は宿帳を取り上げて、福岡県京都郡真崎村小川三四郎二十三年学生と正直に書いたが、女のところへ行ってまったく困ってしまった。湯から出るまで待っていればよかったと思ったが、仕方がない。下女がちゃんと控えている。やむを得ず同県同郡同村同姓花二十三年とでたらめを書いて渡した。そうしてしきりに団扇を使っていた。

やがて女は帰って来た。「どうも、失礼致しました」と言っている。三四郎は「いいや」と答えた。

三四郎は革鞄の中から帳面を取り出して日記をつけ出した。書くことも何もない。女がいなければ書くことがたくさんあるように思われた。すると女は「ちょいと出て参ります」と言って部屋を出て行った。三四郎はますます日記が書けなくなった。どこへ行ったんだろうと考え出した。

そこへ下女が床をのべに来る。広い蒲団を一枚しか持

って来ないから、床は二つ敷かなくてはいけないと言うと、部屋が狭いとか、蚊帳が狭いとか言って埒があかない。面倒がるようにも見える。しまいにはただいま番頭がちょっと出ましたから、帰ったら聞いて持って参りましょうと言って、頑固に一枚の蒲団を蚊帳一杯に敷いて出て行った。

それから、しばらくすると女が帰って来た。どうも遅くなりましてと言う。蚊帳のかげで何かしているうちに、がらんがらんという音がした。小供に見舞の玩具が鳴ったに違いない。女はやがて風呂敷包を元の通りに結んだと見える。蚊帳の向うで「お先へ」と言う声がした。三四郎はただ「はあ」と答えたままで、敷居に尻を乗せて、団扇を使っていた。いっそこのままで夜を明かしてしまおうかとも思った。けれども蚊がぶんぶん来る。外ではとても凌ぎきれない。三四郎はついと立って、革鞄の中から、キャラコの襯衣と洋袴下を出して、それを素肌へ着けて、その上から紺の兵児帯を締めた。それから西洋手拭を二筋持ったまま蚊帳の中へはいった。女は蒲団の向うの隅でまだ団扇を動かしている。

「失礼ですが、私は癇性で他人の蒲団に寝るのが嫌だから……少し蚤除けの工夫をやるからごめんなさい」

三四郎はこんなことを言って、あらかじめ、敷いてある敷布の余っている端を女の寝ている方へ向けてぐるぐる捲き出した。そうして蒲団の真中に白い長い仕切りをこしらえた。女は向うへ寝返りを打った。三四郎は西洋手拭を広げて、これを自分の領分に二枚続きに長く敷いて、その上に細長く寝た。その晩は三四郎の手も足もこの幅の狭い西洋手拭の外には一寸も出なかった。女とは一言も口をきかなかった。女も壁を向いたままじっとして動かなかった。

夜はようよう明けた。顔を洗って膳に向った時、女はにこりと笑って、「昨夜は蚤は出ませんでしたか」と聞いた。三四郎は「ええ、ありがとう、おかげさまで」というようなことをまじめに答えながら、下を向いて、お猪口の葡萄豆をしきりに突っつき出した。

勘定をして宿を出て、停車場へ着いた時、女ははじめて関西線で四日市の方へ行くのだということを三四郎に話した。三四郎の汽車は間もなく来た。時間の都合で女は少し待ち合わせることとなった。改札場の際まで送って来た女は、

「いろいろご厄介になりまして、……ではご機嫌よう」

と丁寧にお辞儀をした。三四郎は革鞄と傘を片手に持ったまま、あいた手で例の古帽子を取って、ただ一言、

「さよなら」と言った。女はその顔をじっと眺めていた、が、やがて落ちついた調子で、

「あなたはよっぽど度胸のない方ですね」と言って、に

やりと笑った。三四郎はプラット・フォームの上へ弾き出されたような心持がした。車の中へはいったら両方の耳が一層ほてり出した。しばらくはじっと小さくなっていた。やがて車掌の鳴らすロ笛が長い列車の果てから果てまで響き渡った。列車は動き出す。三四郎はそっと窓から首を出した。女はとくの昔にどこかへ行ってしまった。大きな時計ばかりが眼についた。三四郎はまたそっと自分の席に帰った。乗合は大分いる。けれども三四郎の挙動に注意するようなものは一人もない。ただ筋向うに坐った男が、自分の席に帰る三四郎をちょっと見た。

三四郎はこの男に見られた時、何となくきまりが悪かった。本でも読んで気をまぎらかそうと思って、革鞄をあけて見ると、昨夜の西洋手拭が、上のところにぎっしり詰まっている。そいつを傍へ掻き寄せて、底の方から、手にさわった奴を何でもかまわず引き出すと、読んでもわからない*ベーコンの論文集が出た。ベーコンには気の毒なくらい薄っぺらな粗末な仮綴である。元来汽車の中で読む了見もないものを、大きな行李に入れ損なったから、片づけるついでに提革鞄の底へ、ほかの二三冊といっしょに放り込んでおいたのが、運悪く当選したのである。三四郎はベーコンの二十三頁を開いた。ほかの本でも読めそうにはない。ましてベーコンなどはむろん読む気にならない。けれども三四郎はうやうやしく二十三頁を開いて、万遍なく頁全体を見廻していた。三四郎は二十三頁の前で一応昨夜のおさらいをする気である。

元来あの女は何だろう。あんな女が世の中にいるものだろうか。女というものは、ああ落ちついて平気でいられるものだろうか。無教育なのだろうか、大胆なのだろうか。それとも無邪気なのだろうか。要するに行けるところまで行って見なかったから、見当がつかない。思いきってもう少し行って見るとよかった。けれども恐ろしい。別れ際にあなたは度胸のない方だと言われた時には、びっくりした。二十三年の弱点が一度に露見したような心持であった。親でもああうまく言いあてるものではない。……

三四郎はここまで来て、さらに悄然してしまった。どこの馬の骨だかわからないものに、頭の上がらないくらいどやされたような気がした。ベーコンの二十三頁に対してもはなはだ申しわけがないくらいに感じた。

どうも、ああ狼狽しちゃ駄目だ。学問も大学生もあったものじゃない。はなはだ人格に関係してくる。もう少しはしようがあったろう。けれども相手がいつでもああ出るとすると、教育を受けた自分には、あれよりほかに受けようがないとも思われる。するとむやみに女に近づいてはならないというわけになる。何だか意気地がない。非常に窮屈だ。まるで不具にでも生まれたようなもので

ある。けれども……

三四郎は急に気を易えて、別の世界のことを思い出した。――これから東京に行く。大学にはいる。有名な学者に接触する。趣味品性の具わった学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しがる。というような未来をだらしなく考えて、大いに元気を回復して見ると、別に二十三頁の中に顔を埋めている必要がなくなった。そこでひょいと頭を上げた。すると筋向うにいたさっきの男がまた三四郎の方を見ていた。今度は三四郎の方でもこの男を見返した。

髭を濃く生やしている。面長の脊せぎすの、どことなく神主じみた男であった。ただ鼻筋がまっすぐに通っているところだけが西洋らしい。学校教育を受けつつある三四郎は、こんな男を見るときっと教師にしてしまう。男は白地の絣の下に、丁重に白い襦袢を重ねて、紺足袋をはいていた。この服装から推して、三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。大きな未来を控えている自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。男はもう四十だろう。これより先もう発展しそうにもない。

男はしきりに煙草をふかしている。長い煙を鼻の穴から吹き出して、腕組をしたところは大変悠長に見える。そうかと思うとむやみに便所か何かに立つ。立つ時にうんと伸びをすることがある。さも退屈そうである。隣に乗り合わせた人が、新聞の読み殻を傍に置くのに借りて看る気も出さない。三四郎はおのずから妙になって、ベーコンの論文集を伏せてしまった。ほかの小説でも出して、木気に読んで見ようとも考えたが面倒だから、やめにした。それよりは前にいる人の新聞を借りたくなった。あいにく前の人はぐうぐう寝ている。三四郎は手を延ばして新聞に手をかけながら、わざと「おあきですか」と髭のある男に聞いた。男は平気な顔で「あいてるでしょう。お読みなさい」と言った。新聞を手に取った三四郎の方はかえって平気でなかった。

あけて見ると新聞には別に見るほどのことも載っていない。一二分で通読してしまった。律義に畳んで元の場所へ返しながら、ちょっと会釈すると、向うでも軽く挨拶をして、

「君は高等学校の生徒ですか」と聞いた。

三四郎は、かぶっている古帽子の徽章の痕が、この男の眼に映ったのを嬉しく感じた。

「ええ」と答えた。

「東京の？」と聞き返した時、はじめて、

「いえ、熊本です。……しかし……」と言ったなり黙ってしまった。大学生だと言いたかったけれども、言うほどの必要がないからと思って遠慮した。相手も「はあ、そう」と言ったなり煙草を吹かしている。なぜ熊本の生

徒が今ごろ東京へ行くんだとも何とも聞いてくれない。熊本の生徒には興味がないらしい。この時三四郎の前に寝ていた男が「うん、なるほど」と言った。それでいてたしかに寝ている。ひとりごとでも何でもない。髭のある人は三四郎を見てにやにやと笑った。三四郎はそれを機会に、

「あなたはどちらへ」と聞いた。

「東京」とゆっくり言ったぎりである。何だか中学校の先生らしくなくなって来た。けれども三等へ乗っているくらいだから大したものでないことは明らかである。三四郎はそれで談話を切り上げた。髭のある男は腕組をしたまま、時々下駄の前歯で、拍子を取って、床を鳴らしたりしている。よほど退屈に見える。しかしこの男の退屈は話したがらない退屈である。

汽車が豊橋へ着いた時、寝ていた男がむっくり起きて眼をこすりながら下りて行った。よくあんなに都合よく眼をさますことが出来るものだと思った。ことによると寝ぼけて停車場を間違えたんだろうと気遣いながら、窓から眺めていると、決してそうでない。無事に改札場を通過して、正気の人間のように出て行った。三四郎は安心して席を向う側へ移した。これで髭のある人と隣り合せになった。髭のある人は入れ換って、窓から首を出して、水蜜桃を買っている。

やがて二人の間に果物を置いて、

「食べませんか」と言った。

三四郎は礼を言って、一つ食べた。髭のある人は好きと見えて、むやみに食べた。三四郎にもっと食べろと言う。三四郎はまた一つ食べた。二人が水蜜桃を食べているうちに大分親密になっていろいろな話を始めた。

その男の説によると、桃は果物のうちで一番仙人めいている。何だか馬鹿見たような味がする。第一核子の恰好が無器用だ。かつ穴だらけで大変面白く出来上がっていると言う。三四郎ははじめて聞く説だが、随分つまらないことを言う人だと思った。

次にその男がこんなことを言い出した。子規は果物が大変好きだった。かついくらでも食える男だった。ある時大きな樽柿を十六食ったことがある。それで何ともなかった。自分などはとても子規の真似は出来ない。——三四郎は笑って聞いていた。けれども子規の話だけには興味があるような気がした。もう少し子規のことでも話そうかと思っていると、

「どうも好きなものには自然と手が出るものでね。仕方がない。豚などは手が出ない代りに鼻が出る。豚をね、縛って動けないようにしておいて、その鼻の先へ、ご馳走を並べておくと、動けないものだから、鼻の先がだんだん延びて来るそうだ。ご馳走に届くまでは延びるそう

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertong